

# 研究部ニュース 2023年度第3号

2024年2月28日(水)

発行者：研究部

平素は本校の教育及び研究活動にご協力いただきありがとうございます。1月から始まった3学期もまもなく終了です。研究活動も順調に進めてきました。

## 研究大会(2年次)について



全校研究主題を「知的障害特別支援学校における教育課程の編成と評価の一体化」とし、令和6年2月10日に研究大会(2年次)を実施しました。全国から89名の先生方に参加していただきました。本校からの基調提案に対する指導助言を本学特別支援教育部門の今枝史雄先生からいただき、研究大会の最後は、文部科学省 初等中等教育局 特別支援教育課 特別支援教育調査官 加藤宏昭先生から「指導と評価の一体化に基づいた授業づくりのために～単元計画の改善・充実から考える～」と題するご講演を賜りました。大会後のアンケートでは、感想や質問を多数いただき、次年度の研究につながる大会となりました。



研究大会当日の様子

## ユニット研究について

本校教員と大学教員との連携研究である13の「ユニット研究」は、特別支援教育の今日的課題に対応した内容の授業実践・実験研究などを網羅して取り組みを行っています。今年度実施されたユニット研究の内容を紹介します。

- 1 知的障害特別支援学校高等部における作業能力の向上をめざしたアプローチ ◎丹沢正太・○金憲央・大原健哲・深草武志・村山希世・森久美子・森下紘菜 【共同研究者 大内田 裕(大阪教育大学 特別支援教育部門)】

本稿は、知的障害特別支援学校高等部における作業能力の向上をめざした実践的、研究的な指導・支援のアプローチモデルの一考察として、個別に最適な環境調整を行うことにより、課題のパフォーマンスがどの程度変化するのか、またどの程度共通しているのかを明らかにすることを目的とする。

本実践における作業能力課題への最大限の能力発揮をするための考え方として、それぞれの生徒が最適な環境調整で作業能力課題に向き合うなかで、気になる動きを捉えて目標物への身体の向きや直接的な動きの援助などを介すことで、適切な個別への指導・支援の教育的アプローチの一方法論が考えられた。

- 2 知的障害特別支援学校における「さわる」を取り入れた美術鑑賞の実践的研究 ◎花田知恵・○保田洋幸 【共同研究者 正井 隆晶(大阪教育大学 特別支援教育部門)】

本研究は知的障害特別支援学校における「さわる」を取り入れた美術鑑賞の学習モデルの検討を目的とした。中学部美術科で美術作品(絵画)に加えて、その触図と実物を「さわる」過程を取り入れた美術鑑賞を実施し、その学習評価から「さわる」を取り入れる学習効果を検証した。鑑賞時の生徒の発言を「鑑賞ループリック」(新関・松岡, 2020)で「思考・判断・表現」の観点で評価し、生徒の行動を「主体的な学び」(文部科学省, 2017)を定義し直した「さわる」美術鑑賞における「主体的に学習に取り組む態度」で評価した。その結果、触覚をたよりに作品の全体及

び部分を主体的に注目して鑑賞する生徒の姿が見られた。今後は、「さわる」を取り入れることでの学習効果を比較検証していきたい。

3 知的障害特別支援学校における課題関連図を活用した自立活動の実践の在り方 ◎大河竜介・○花田知恵・本多克敏

【共同研究者 早野 眞美（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

「自立活動のチェック表」に沿ってアセスメントを行ない、それをもとに課題関連図を作成し指導仮説を立て実践を行なった。課題関連図を作成したり指導仮説を立てたりして段階を踏んで指導内容を決定したことで、より実態に即した実践となり日常生活や学習活動などでの行動の変化の様子が観察された。自立活動に取り組み改善した姿が他教科での学習でも見てとれた。課題関連図を図示すること、指導仮説を立てること、そしてそれらを共有できるような形で残しておくことが有効だとわかった。今回の事例では粗大運動の力に注力したことが日常での活動や学習活動をより充実させることにつながった。

4 知的障害特別支援学校の音楽科の授業における Ontenna の活用に向けた考察 ◎竹内ゆりか・岩崎弘・森下紘菜

【共同研究者 湯浅 哲也（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

本研究では様々なニーズを必要とする知的障害特別支援学校における音楽科の授業での一斉指導の困難さを軽減するために、触覚刺激を用いた指導・支援方法についての検討を行う。Ontenna を用いたリズム提示実験を通して、視覚刺激を用いることで提示されたリズムがとれるようになる生徒とリズムを取りづらくなる生徒がいることがわかった。この結果をもとに、リズム指導の導入期（リズム感がない時期）は触覚を用いた指導を行い、徐々にリズム指導に慣れてきたら（習得してきたら）、触覚なしで指導するのが良いのではないかという仮説を得ることができた。今後は仮説の検証と Ontenna に適したリズム・パターンの検討、リズム表現に関する援助について、身体特性の側面から実践的な研究を進めていくことが課題である。

5 昨日できたことが今日できない生徒たち一日々の握力の数値から一  
◎大原健哲・○花田知恵・竹内ゆりか・西川裕子・野崎善之・的場早紀  
村山希世・保田洋幸

【共同研究者 大内田 裕（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

大原ら（2022）令和4年度のユニット研究「知的障害特別支援教育における手指の巧緻性向上を目指したアプローチ」において、握力を向上する指導を行うことで手指の不器用さが軽減するのではないかという仮説のもと分析・検証を行った。3週間の握力トレーニング後の生徒たちの握力値と巧緻性検査の結果では、巧緻性検査ではほとんどの生徒の数値が向上した反面、握力値が下がった生徒がかなりいたことで握力と巧緻性の間に関係性を見出すことができなかった。今年度は知的障害のある生徒たちの握力に焦点を当て、生徒たちの握力を向上させるための方法を探ることと生徒たちの日々の握力値の様相を知ることが課題として分析・検証を行う。

6 知的障害特別支援学校における学習姿勢の向上を目指した指導アプローチ  
一四つ這い姿勢を取り入れた体幹トレーニングと学習姿勢の関連性の予備的検討  
◎本多克敏・○深草武志・野崎善之

【共同研究者 大内田 裕（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

本研究では、学習時の姿勢の安定を目指し、体幹の安定を図るための指導アプローチを明らかにするための研究活動を行ってきた。四つ這い姿勢に着目し、体幹トレーニングを行うことで座位姿勢に変容が見られるのではないかと考え、その知見を得るため生徒1名に対し四つ這い姿勢で片足を上げて支える体幹トレーニングを行った。体幹トレーニングを通して、最初は腰を反らせ、足を高く上げて支えていたが、次第にフォームが安定し脚部を支え取り組むことができた。一方で、座位姿勢の前後での変化は認められず、対象生徒の座位の安定度を定量的に測定していくことやアセスメントをより細かく実施していくことの検討の余地を残した。

## 7 知的障害特別支援学校におけるダンス指導モデルの活用に向けて

—自己への気づきを促すヨガの実践— 竹内ゆりか

【共同研究者 西山 健（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

学校教育におけるダンスは自己表現やコミュニケーションを促す活動として期待されている。本研究では、竹内（2023）で提案した「知的障害特別支援学校におけるダンス指導モデル」の活用に向けて、自己意識を高める段階の活動としてヨガの呼吸やポーズを導入した実践を行い、その効果について検討した。その結果、ヨガマットと仰向けになった体との接地面に対する感覚の表現やヨガの呼吸やポーズへの参加の様子から、「確認」「自己認識」「調整」の段階が確認されるとともに、ヨガの呼吸やポーズの実施が自己意識の促進に影響を与えていることが示唆された。また今後の課題として、ヨガの呼吸やポーズを指導する際の工夫、ダンス活動へと繋げていくための方法や過程の検討などの点が挙げられた。

## 8 特別支援学校における自己決定・自己選択の育成について

辻奈誠子 【共同研究者 西山 健（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

本研究では、厚生労働省が提示する「障害福祉サービスの利用等に当たっての意思決定支援ガイドラインについて」を基に、障害の有無にかかわらず「自己選択・自己決定できる」ことや、「決定したことを相手に伝えることができる」ことが今後の社会生活に向けて必要なことであるとの考えから、自己選択・自己決定ができるようになるまでの有効な支援方法や環境等について考察し、提言を行うことを目的とする。具体的には、心理安定型支援やアドラー心理学の勇気づけるメッセージを用いた応用行動分析学の社会的称賛を用いて、「発言しやすい」「自分の気持ちを相手に伝えやすい環境づくり」や活動内容や活動期間が記されたプリントを用いた「見通しのもてる学習の効果」について検討し、自己決定の成長に有効な支援についての考察を行った。

## 9 刺激ペアリング手続きを使ったひらがなの読み指導—データに基づく指導方法の検討— ◎白樫麻紀・○西川裕子・池村憂美・的場早紀

【指導助言者 野田 航（大阪教育大学 大学院連合教職実践研究科）】

ひらがなの読みが未習得の生徒に、刺激ペアリング手続きを用いた読み指導をおこなった。刺激ペアリング手続きとは、文字、音声、絵（意味）を時間的に近接した状態で提示することで3つの要素間の等価関係を成立させるという手続きのことである。指導の効果をデータで確認しながら、3期に分けて指導方法の検討をおこなった。ひらがなの読みの獲得までは順調に進んだが、維持の点で課題が残った。刺激語の選び方や課題の合格条件、強化の仕方、ひらがな指導の前提条件としての音韻認識の確認などが今後の課題である。

## 10 知的障害特別支援学校高等部における卒業後を見据えた学びについてⅡ

—卒業生への生活状況調査を通して— 迫田真喜

【共同研究者 今枝 史雄（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

本研究は、知的障害特別支援学校在籍生徒のうち、高等部卒業からその後の社会生活を送るうえで対人コミュニケーションに課題を持つ生徒がどのような進路先を選択し、またその前後においてどのような困難に向き合わなければならないかを分析し、今後の社会生活に役立てる最適な支援の方法について考察するものである。特に就労後の離職率にも着目し、在学中から各進路先とのミスマッチングを未然に防止することを一つの目的として研究に取り組んだ。研究手法として本校卒業生へアンケートと、インタビューを通じたヒアリングを数年に渡って継続実施することで、卒業生たちのライフステージに応じたニーズの変化や、進路先が求めるトレンドの移り変わり等についても明らかにしていく。また、それらを通じて卒業生の現状を把握し、必要に応じたアフターケアに役立てる。さらに、アンケート結果より得られたデータからフィードバックを行い、高等部教育課程の見直しに活用する。

## 1 1 知的障害特別支援学校美術科における対話型鑑賞の実践的研究—主体的・対話的で深い学びに基づく授業モデルの検討— 花田知恵

【共同研究者 今枝 史雄（大阪教育大学 特別支援教育部門）／研究協力者 吉原 和音（京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター 研究員）】

本研究は知的障害特別支援学校における「主体的・対話的で深い学び」に基づく対話型鑑賞の授業モデルの検討を目的とした。中学部美術科での対話型鑑賞における生徒の発言を「主体的な学びの発言」「対話的な学びの発言」「深い学びの発言」「その他の発言」の4つに分類し、それらの割合と「深い学びの発言」の現状分析を行った。その結果、3観点の発言の関係性の再認と「深い学びの発言」がみられる時間帯とその過程の特徴を捉えることができた。今後は、「深い学びの発言」に至る過程に基づいて、対話型鑑賞を実施することで「深い学びの発言」数が増えるかを検討していきたい。

## 1 2 校内にある教育資源活用を試みた「学び合いの場」の実践

◎松本宜明・池村憂美・岩橋鈴奈・迫田真喜・住岡優志・丹沢正太  
辻奈誠子・本多克敏・森久美子・森下紘菜

【共同研究者 餅木 哲郎（大阪教育大学教職連合大学院）・家近 早苗（東京福祉大学）】

【研究目的】特別支援学校は、教育だけでなく福祉や医療分野等の様々な専門家が関わっている。これらの専門家との連携を進め、児童生徒にきめ細かい指導・援助を行うために複数担任制やティームティーチングなどを用いている。本校においても学年や学部との連携を進めている。本研究は、本校の高等部と中学部が協力して行う「学び合いの場」が生徒への指導・援助にどのような影響を与えるかを検討することを目的とする。【方法】本校高等部の教員を対象に、「学び合いの場」を実施し、参加者へ個別の振り返りを実施する。その内容を記録した。【結果】「学び合いの場」と個別の振り返りは7月、9月、11月の3回実施した。高等部と中学部の教員のべ16名が参加した。石隈・田村式援助チームシート5領域

版（石隈利紀，1999）を活用した。【考察】「学び合いの場」は学部を越えて教員同士の連携を促進する機能があることが分かった。その機能は、生徒への具体的な援助を広げることや、継続的な援助実行の促進などである。

## 1 3 特別支援学校のシラバスの検討

◎松本宜明・金憲央・野崎善之・花田知恵

【共同研究者 今枝 史雄（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

【目的】：2020年に改訂された新学習指導要領のポイントにカリキュラム・マネジメントの確立が挙げられ、対象になっている項目の中に「育成を目指す資質・能力」がある。三つの柱にまとめられた資質・能力が身に付いたかどうかを評価するため、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三観点到整理された。大阪府教育委員会は、この三観点を含む「指導と評価の年間計画（シラバス）」の作成を大阪府が定めた様式で作成する指示を大阪府の全支援学校へ出している。本研究目的は「教務関連の分掌を担当している教員へのインタビュー調査を通して、大阪府立の支援学校が運用しているシラバスの学校現場への影響を検討する。検討結果を基に、大阪府立支援学校全体に対するアンケート調査項目を作成することを目的とする。」である。【方法】：大阪府立の支援学校の教務分掌担当者にインタビューを行い、内容を逐語化する。【結果】：逐語からアンケート調査項目を作成した。【考察】インタビューを通じて、大阪府教育委員会に提出するためのシラバス作成業務が、その学校の教育実践を振り返り、まとめることにつながったと考えられる。